

音楽と私

流山シニアアンサンブル 木村辰雄

「お前、フルートをやれよ」と声をかけてきたのはフルートの教員である。これで四回目である。「ちよつと聴けよ」と云つてフルートを吹きはじめた。初めて聴いたその曲は、指の動きが速く哀愁を帯びた華麗な旋律は私の胸に響いた。

ここは横須賀海兵団のなかにある海軍軍楽隊の兵舎である。昭和十九年（1944）五月、全国から応募し、学科、身体、適性の各検査に合格した十五歳から十八歳の健児一五十人は、各自の希望の楽器をきめることになった。すでに学校や職場のブラスバンドで経験している者も多く、それぞれの希望の楽器の教員のもとに集まっていた。楽譜は読めない、楽器の名前もよく知らない、音楽にはド素人の私はただオロオロして焦るばかりであった。

そこに最前から声をかけてくれたのがフルートの教員だった。「どうだ、いいだろう。」この曲は、ハンガリー田園幻想曲というフルートの独奏曲なんだ。「どうだ、フルートをやれよ」と強く勧められて、思わず「ハイッ」と返事をしてしまった。これが音楽との出会いであり、フルートとの出会いでもあった。

以来、練習生として昭和二十年九月十日の卒業を目指して練習に励んだが、八月十五日に終戦となつて一ヶ月不足で卒業できずに終わった。

毎日朝食から夕食までの練習にうんざりして、楽器を見るのもイヤになつたこともあつたが、習つた曲数は一七五曲に及ぶ。終戦後は縁があつて創立される京都音弦楽団に採用された。

私は舞い上がったが、後年を考えると私ごときが採用されたといふことは、戦後のドサクサ時代だったからで、時代が落ち着いてきたらすぐに淘汰されるだろう。



ともあれ昭和二十一年（1946）八月十日京都市新聞で発表会があり新聞では好評だった。姉妹劇団の京都歌劇団の創立公演「ゼンダ城の虜」が同年八月二十七日から九月十日まで、三条大橋のもとにある先斗町歌舞練場で上演されるので、その伴奏をした。翌年は「三銃士」を上演した。

公演が終わると三班に分かれて巡業に出る。ドサ廻りだ。何でも初めてのことで珍しく面白い。都会では食べ物が少ないインフレで高い。それから地方では食料が豊富でうまい。これからの生活が続くのかな、と考えているとき、突然別の自分があらわれて、こんなことしていいのかわからない、疑問が湧いたのだ。いろいろ悩んだ末、思い切つて都庁に勤め、夜、行きつ、戻りつ夜学に通学こ

フルートは手にしないと誓った。後戻りを恐れたのだ。以来六十年、一切の仕事をやめた。七十六歳から音楽教室に通い始めた。フルートのグループレッスンや個人レッスンなどを受けた。八十六歳のとき先生から「ハンガリーをやりませんか」と勧められて驚いたがすぐその気になつた。フルートをやるきっかけになつた曲だ。音楽の友社ホールで演奏したが、緊張が走つて練習のときのほうがよかつたのではないかと思つた。先生は「そのお歳でこの曲を演奏されたのは日本ではギネスですよ」と云われた。

令和三年（2021）流山シニアアンサンブルの結成を知り応募した、いろいろなジャンルの曲をいろいろな楽器の音で豊かなハーモニーを演奏するのはこの上なく楽しい。

このような機会を与えて下さつた岡村さん、指導を下さる横林先生に深く感謝申し上げます。年齢による体力の衰えの影響が演奏

にあらわれ、先生をはじめ団員の方々に迷惑をおかけしていると感じる昨今だが、努力していま少し続けられるようにと念じている。

